

を抑制しないと思われた。しかし1.5%のイソフルレンは片肺換気中のHPVを抑制するという報告もあり、その影響は否定できない。今後、PGE1濃度とともに詳細に検討する必要があると考える。

24) 最近経験した術後末梢神経麻痺の2症例

鈴木 規子・小田 真也
 山川真由美・工藤 雅哉 (山形大学)
 堀川 秀男 (麻酔・蘇生科)
 渡辺 博 (同手術部)

麻酔中に発症した上肢末梢神経麻痺の2例を報告した。1例は頸髄脊髄空洞症に対する脊髄空洞一クモ膜下シャント術を腹臥位で行った後に生じた左正中神経麻痺、他の1例は未破裂脳動脈瘤に対するクリッピング術を行った後に生じた右橈骨神経麻痺である。2例目は、手術台を右下にかなり傾けた仰臥位で行われ、手術終了後、前腕橈側近位部に自動血圧計送排気ホースの強い圧迫痕がみられた。どちらの症例も、自動血圧計の送排気ホースによる神経圧迫が麻痺の原因として最も疑われた。

このような神経麻痺を予防するためには、従来の体位固定時の注意に加えて、モニターの装着や手術台の傾斜も考慮した慎重な配慮が必要である。

25) 術中出血性ショック症例の検討

藤岡 齊・宮田 玲子
 本間 富彦・小林 昇 (長岡赤十字病院)
 田中 剛・高田 俊和 (麻酔科)

過去5年間に当院で経験した術中出血性ショック症例12例を検討した。

術後全例に複数の臓器機能障害を認めた。出血性が増えるに従って、術後臓器機能障害とその重症度が増大する傾向が認められた。

術中に生じた出血性ショック症例においては、術後MOFに移行する可能性があり、この点に留意して術後管理を行なう必要があると思われた。

26) 術中使用を通じてのCOMBIチューブに関する一考察

西巻 浩伸・和栗 紀子 (新潟県立中央病院)
 丸山 正則 (麻酔科)

COMBIチューブは、食道閉鎖式エアウェイの一種と

しても、緊急時の気道確保に用いられており、救急救命士にもその使用が認められている。今回我々は、全身麻酔中の患者においてコンビチューブを使用し、その有効性を検討した。挿入手技の習得には多少の修練が必要であるが、心肺蘇生時のみならず手術時にも簡便かつ効果的な気道確保が可能であることが分かった。チューブの規格は欧米人向けであり、日本人での使用にはチューブの深さ、咽頭バルーンの数など若干の注意が必要である。息こらえ、咽頭痛などの合併症は、緊急時の気道確保に用いる場合には必ずしも問題とはならない。

II. 特別講演

「麻酔と不整脈」

大阪大学医学部麻酔学教室教授

吉 矢 生 人 先生

第2回 DIC 研究会

日 時 平成7年7月21日(金)
 午後6時15分～8時30分
 会 場 ホテル新潟
 2F 芙蓉の間

I. 一般演題

1) HELLP 症候群における血液凝固系について

小林 美穂・広瀬 保夫 (新潟市民病院)
 本多 拓 (救急救命センター)
 真田 雅好・高井 和江 (同 血液科)
 斎藤 徳子・菊池 正俊 (同 腎臓原病科)
 吉田 和清 (同 腎臓原病科)
 花岡 仁一・竹内 裕 (同 産婦人科)
 徳永 昭輝 (同 産婦人科)

HELLP 症候群は重症妊娠中毒症に続発し、溶血、肝機能障害、血小板減少を呈する原因不明のまれな病態である。我々は2例のHELLP 症候群を経験し、血液凝固系について検索する機会を得たので報告する。【症例1】35歳、2妊2産でこれまでに妊娠中毒症はみられず、妊娠36週、尿蛋白・高血圧・浮腫を認め、妊娠中毒症と診断された。39週2日陣痛発来し、近医にて経膈で女兒を娩出した。娩出8時間後に不穏・意識障害が出現